

上映映画解説

1953, 10~11

国立近代美術館 ファイルム ライブラリー



No. 14

寒椿

「寒椿」鑑賞会について

フィルム・ライブラリーでは、その事業の一部として、歴史的価値のある芸術性豊かな映画を鑑賞し研究する会を開催しております。今回はその第五回として「寒椿」をとり上げることにしました。

「寒椿」は、一九二一年（大正一〇年）国際活動写真株式会社荊著撮影所で製作された映画で、小島孤舟の小説「湖畔の家」を脚色し新劇畑の畑中蓼が監督し、井上正夫のアメリカからの帰朝第一回作品として、同年四月二四日有楽座で封切され、興業的にも可成りの成功を収めました。

「寒椿」七巻

大正一〇年 国活荊著撮影所映画
脚色 荊 本 清
監 督 畑 中 蓼
撮 影 酒 井 健 三
舞台意匠 斎 藤 五 郎
字幕意匠 賀 来 清 三 郎

配 役

水車小屋の主人 戸畑 伍助 井 上 正 夫
伍助の一人娘 おすみ 覆 面 令 嬢
乗合馬車の馭者 林造 吉 田 豊 作
伯爵の息子 花園 朝彦 高 勢 実 (実乗)
朝彦許嫁 貴美子 林 千 歳
花園家令石 塚源之進 水 島 亮 太 郎
山田 一作 刑 事 星 素
伯爵家の侍女 お咲 (志 賀 靖 郎)
同 御 宮 部 静 子
御 園 艶 子

当時のキネマ旬報第六四号（一九二一年五月一日号）は、この映画の紹介批評文を載せ、「略筋 馭者の林造は水車場の主人伍助の娘おすみを五十円の貸金の代りに嫁にしよとしたが、娘は下卑た彼を嫌つて居

た。その中おすみは花園伯爵家の小間使となる。桃の節句の戯れに伯爵が彼女に与えた指環を娘は許嫁の印しと思ひ、その喜びを父に伝える。林造が娘を要求し、伯爵家に暴れ込まふとしたのを知つた伍助は、百方手を尽して彼を止めるが、林造に打ち据えられ足蹴にされて逆上し娘の為に林造を手にかけて殺し、悲しい別れを娘に告げて悄然と刑事に引立てられて行く。淋しく月はその後姿を照した。

非常に意気込みで井上正夫氏が帰米後第一回作品として製作したもので、今迄の帰山映画を撮影した酒井氏の老練な技術で実に立派に撮られて居る。監督の畑中氏は芸術座の舞台監督等をした人であるが、映画に於ては之が始めての経験であるから、所謂映画劇としての要素をこの映画に求める人は失望するに違ひない。飽く迄も井上氏の演技を主として製作した映画である以上、舞台劇そのまゝを撮影したものの様に見える個処の多いのは致し方あるまい。（中略）この映画で第一に賞讃すべきは美しい撮影と、それを引き立てる調色の妙である。ラスト・シーンの遠写等は深い感銘を与える。——と報じています。

又この映画について菅見恒夫氏は「映画五十年史」の中で「この時代の、純映画劇運動として注目していいのは、井上正夫が国活のために主演した「寒椿」である。井上は、新派劇壇切つての新人として定評があり、「大尉の娘」でも好評を博したのち、連鎖劇のマンネリズムに陥つていたが、アメリカへ渡り、帰朝後最初の国活のための新作には相当に新人らしい意気込みをもつて、監督として、「新劇協会」の舞台でメーテルリンクの「青い鳥」を演じて評判の高い畑中蓼を迎え、酒井健三がカメラを担当した。しかも、井上は、新しい時代に即して女優採用をもくろみ、主人公の水車小屋の番人伍助の娘おすみの役に、某匿名令嬢として、若い女優を採用した。これが芸術座の水谷竹紫の義妹、水谷八重子の処女出演なのであつた。（中略）女優を使つたこと、スポークン・タイトルを使つたこと、井上が熱心に役柄にぶつかつていたことなどによつて、感銘はそんなに浅いものではなかつた。——と述べています。

当時の日本映画界で作られていた映画は、「路上の靈魂」（松竹キネマ研究所第一回作品総監督小山内薫、脚本牛原虚彦、監督村田実）をはじめ「山暮るゝ」（松竹キネマ研究所、脚色北村小松、監督牛原虚彦）「蛇性の淫」（大正活映株式会社、監督栗原トモミツ）「酒中日記」（松竹蒲田、原作国木田独步、脚色伊藤大輔、監督賀古残夢）「虞美人草」（松竹蒲田、原作鈴木善太郎、監督撮影小谷ヘンリー）（以上大正一〇年）「アマチュア倶楽部」（大正活映、九年、原作谷崎潤一郎、監督栗原トモミツ）「深山の乙女」（天然色活動写真、八年、原作・監督帰山敦正、脚色水沢武彦）等であり、外国映画では、「鉄路の白薔薇」（仏、一〇年、アベル・ガンス）「女郎蜘蛛」（仏、一〇年、ジャック・フェデー）「キッド」（米、一〇年、チャップリン）「アラオの恋」（独、一〇年、エルンスト・ルビッチ）「カリガリ博士」（独、八年、ロベルト・ウイネ）「散り行く花」（米、八年、グリフィス）「朝から夜中まで」（独、八年、ハイリッ・マルティン）「ドクトル・マブゼ」（独、一一年、フリッツ・ラング）等が作られた時代です。（引用文の仮名づかい原文のまま）

なお、フィルム・ライブラリーの特別映画鑑賞会でとり上げた映画は次のとおりです。

- 第一回「ジークフリート」 一〇巻
- （一九二四年、独ウファ映画、監督フリッツ・ラング）
- 第二回「ヴァリエテ」 一〇巻
- （一九二五年、独ウファ映画、監督E・A・デュボン、撮影カール・フロイント）
- 第三回「アツシヤ家の末裔」 五巻
- （一九二八年、仏、監督ジャン・エプスタン、撮影ルーカス）
- 第四回「ジゴマ」 四巻
- （一九一一年、仏エクレール映画、監督グイック・トラン・ジャッセ）
- 第五回「美と力への道」 一〇巻
- （一九二五年、独ウファ文化映画、監督ヴァイルヘルム・プラーゲル）